
バウムガルテンにおける美の規則の「例外」

井奥 陽子

はじめに

バウムガルテン (Alexander Gottlieb Baumgarten, 1714-1762) が活躍した18世紀中頃は、合理主義から非合理主義への転換期にあたる。そのためバウムガルテンを肯定的に評価する場合、後続する時代の先取りとして非合理主義的な視点が強調される傾向にある。本発表があつかう規則 (regula) に関していえば、先行研究では、バウムガルテンが規則に対して天性 (ingenium) を重視したと主張することに力点が置かれてきた¹。だが本発表では、規則の例外 (exceptio) という概念に着目することによって、バウムガルテンが美の規則をどのように捉えていたのか考察する。議論を先取りすれば、美の規則はしばしば対立すること、そのため美の規則には多くの例外があることをバウムガルテンは認めている。しかしながら、例外がどのような場合に認められるか、どのような例外ならば美であるかといった点は、バウムガルテンが構築する規則体系の枠内で説明される。その説明の構造を明らかにすることが本発表の課題となる。

本発表は次の手順で進められる。まず『形而上学』(1739年) にそくして²、規則と例外に関する理論の枠組みを考察する(1.)。そのさい適宜、ヴォルフ (Christian Wolff, 1679-1754) とマイアー (Georg Friedrich Meier, 1718-1777) の著作も参照する³。次に、バウムガルテンの特徴が、完全性 (perfectio) の大きさと例外の数の相関関係を強調する点にあることを指摘する(2.)。それらを踏まえて、『美学』(1750/58年)において規則と例外がどのように捉えられているか検討する(3.)。なお、『美学』では特に芸術へ焦点があてられるので、本発表では美の規則を芸術の規則として捉える。また、個々の美の規則の内容とその妥当性を検討することは、本発表の範囲外である。

1. 規則の対立とその解消

まず確認すべきは、完全性という概念である。完全性とは、多様における統一である (Wolff [1736] 503)。すなわち多様なものどもが共通の「理由 (ratio)」⁴をもつとき、それらは「一致」しており、その一致が「完全性」と呼ばれる (Met. 94)。そして規則とは、

あるものがいかにしてその理由と適合するか表したものである (Met. 83)⁵。完全性においては多様なものども間で理由が共通であるから、規則も共通である (Met. 95)。よって、多様なものどもが共通の理由に一致するということと、共通の規則に適合するということは、完全性の成立という同じ事態を示している (Vgl. Meier [1755] 80)。具体例を示せば、道徳における多様なものどもとその理由は、諸行為とその動機にあたる (Meier [1755] 78)。完全性が成立するのは、様々な行為がたとえば「神への愛」という動機をもつときであり、このとき諸行為は「神を愛せ」という規則に適合している (Meier [1755] 80)。むろん、ある行為の動機がひとつとは限らない。諸行為のうちの幾つかが、さらに友情という動機をもつとき、そこには「部分の完全性」が成立しており、このとき神への愛を理由にもつ完全性は「全体の完全性」である (Vgl. Meier [1755] 78; Wolff [1736] 516)⁶。このような複数の理由をもつ完全性は「複合された (composita) 完全性」と呼ばれる (Met. 96)。

さて、完全性には様々な大きさがある。完全性がより大きくなるのは、(1) 多様なものどもがより多くより重大であるとき、(2) 理由がより多くより重大であるとき、(3) 多様なものどもと理由との適合がより多くより強いときである (Met. 185)。ここでは第2の、理由が多いほど完全性は大きくなるという条件に注目しよう。規則とは、あるものがその理由といかにして適合するか表すものであった。そのため、理由が多くなるほど規則も多くなる。したがってバウムガルテンの理論では、規則が多くなるほど完全性は大きくなる。そのため、より大きな完全性を目指そうとすると、規則の対立という問題が避けがたくなる。

規則が対立すると「不完全性」が生じる (Met. 121)⁷。不完全性を回避するためには「例外」を認めなければならない (Met. 97)。たとえば窓の完全性には、採光と眺望というふたつの規則がある (Wolff [1736] 511)。これらが両立しえないときは、例外を認め、どちらかの規則を退けなければならない。眺望の規則を退けた場合、眺めは悪くとも室内を十分に照らすような窓であれば、その窓は完全である (ibid.)。このように、完全性を損なわないために不可避の場合のみ、ある規則に反するものは例外として認められる (Wolff [1736] 512, 513)。要するに例外を許容するということは、対立する規則の一方を退けることによって完全性を確保することである。たんに規則から逸脱するものは「欠陥 (defectus)」でしかない (Met. 82; Vgl. Meier [1755] 83)。

それでは、対立する規則のうちどちらを退ければよいのだろうか。バウムガルテンによると、規則には強弱がある。「強い (fortis) 規則」とはより重要な理由をもつ規則であり、「弱い (debilis) 規則」とはより重要でない理由をもつ規則である (Met. 180)。完全性は、理由が重大であるほど大きくなるのであった。よって、より弱い規則が退けられるべきとみ

なされる。規則の「強度 (robur)」(ibid.) という、いわば規則の階層構造を基準として、退けられるべき規則が決定されるのである。

2. 完全性の大きさと例外の数

以上のような理論は、最善のために小さな悪を容認するというライプニッツの最善説が、全体の完全性のために例外を認めるという理論として定式化されたものと理解することができる⁸。こうした枠組みはヴォルフがすでに整えており、バウムガルテンは基本的にヴォルフを踏襲している。

バウムガルテンの独自性は、完全性が大きくなるほど例外が多くなりうることを強調する点にあるだろう⁹。完全性は、規則が多くなるほど大きくなるのであった。規則が多くなるほど、規則が対立する可能性も高まる。それゆえ「もっとも不完全な世界」には例外がなく (Met. 442)、もっとも完全な世界には例外が非常に多いとバウムガルテンは述べる。

(引用1)

もっとも完全な世界においてはかなり多く完全性の規則があるだろうから、極めて多くの例外が存在することさえ可能である。ただし〔その例外が〕最大の一致を取り除いてしまうことがなく、それゆえに他の条件が同じ場合〔例外が〕もっとも少なくもっとも小さいことが可能であるならば。(Met. 445)

留意すべき点は、例外が存在する可能性について述べられているのであって、例外が実際に多い世界がもっとも完全であると言われているのではないことである。可能な世界のうち、他の条件が同じであれば例外がもっとも瑣末で少ない世界が選ばれる。また、もっとも強い規則を退けるような例外は、もっとも完全な世界では認められない。そのうえで、規則が多いことに対応して、もっとも完全な世界では非常に多くの例外が存在しうるのである。

3. 美における規則と例外

以上のような理論が『美学』へと適用される。美学では、対象とされる完全性は「美 (pulchritudo)」であり (Aes. 14)、扱われる規則は「美の規則」(Aes. 25) である。また、美の規則における欠陥ないし「欠点 (vitium)」(Aes. 24) は「醜 (deformitas)」(Aes. 21) である。そして美学では、美を求め、醜を避けることが目指される (Aes. 14)。以上

を踏まえて、例外について規定された第24項を引用する。

(引用2)

感性的認識の美は、また事象の優美そのものは、複合された完全性である。普遍的な美さえも複合された完全性である。[...] このため、極めて多くの例外を〔人々は〕許容する。たとえ例外が現象となっているとしても、ただ〔その美の中に〕位置を占める最大の一致した現象を例外が圧迫してしまうことがなく、それゆえ例外が量においても質においても最小限であることさえ可能ならば、欠点とみなされるべきではない。

美においては極めて多くの例外が許容される、とバウムガルテンは主張する。この記述のみを取り出すと、バウムガルテンは規則にあてはまらないような作品を称賛していた、あるいは美の規則を重視していなかった、などと解されるかもしれない。しかしこれまでの考察を踏まえるならば、そうでないことは明らかである。

引用2の主張を、言葉を補いながら整理すると次のようになる。まず、美は非常に大きな完全性であることが前提である (Vgl. Pop. 24)¹⁰。美は非常に大きな完全性であるから、美の規則もかなり多い。それゆえ美の規則はしばしば対立し、その解消のために極めて多くの例外が生じうる。ただし、より弱い美の規則を退けるべきであり (Aes. 25)、その美のなかでもっとも強い美の規則を退けてはならない。また、他の条件が同じであれば例外が瑣末で少なくすむ方を選ぶべきである。そのうえで認められた例外は醜ではない。適切に許容された例外は、むしろ美である (ibid.)。それゆえ、美の規則の内容だけでなく強度にも留意しなければならない (Aes. 25, 74)。

では、具体的にはどのような事例があるだろうか。対立する美の規則として、冗長にならないよう簡潔に表すべきであるという規則 (Med. 74 ; Aes. 160) と、より多くの特徴によって事物を描写すべきであるという規則 (Med. 18, 54 ; Vgl. Aes. 618) がある¹¹。バウムガルテンの記述からすると、前者が弱く後者が強い。そのため、たとえば『イリアス』で大将の名と軍船の数が列挙された箇所¹²や、『変身物語』でアクタイオンを噛み殺す犬の説明が続く箇所¹³などは非難されるものではない (Med. 19)。これらの描写は、なるほど簡潔性を犠牲にはしているが、固有名詞や具体的な数字によっていっそう多くの特徴を表すことに成功している。こうした例外を、バウムガルテンは美しい例外と考えていたようである。

以上のように、バウムガルテンは手放しに例外を許容していたのではなく、規則の階層構造を基準としたうえで、美においては例外が非常に多くありうると主張した。したがって、規則に対する無知や無視、またそれによって生じるむやみな例外をバウムガルテンは

非難するが (Aes. 108)、これは例外が多いことを認める記述と矛盾するものではない。そもそもバウムガルテンの主張では、美の規則を判明に捉えることによって美学は「学問」へと高められる (Aes. 74 ; Pop. 1)。それゆえ、バウムガルテンにとって学問としての美学を確立することは、美の規則の体系でもって美を捉えることであつたと言える。

おわりに

本発表では次のことが示された。第一にバウムガルテンは、美の規則が非常に多いこと、また美においては非常に多くの例外が生じうることを認めていた。このことは、完全性の大きさと例外の数との相関関係を強調することに由来した。しかしながら第二に、ある規則に反するものが欠陥であるか例外であるかは、他の規則に適合するか否かによって決定された。また、より弱い規則の方が退けられるべきとみなされ、退けた美の規則がより弱いか否かによって、その例外が美であるか否か判断された。

バウムガルテンは、個々の美の規則に画一的に照らしあわせるような方法によっては美を判定することはできないと考えていた。だが同時に、美学を学問として確立するために、あくまでも美の規則の体系でもって美を捉えようとした。本発表の考察から、このように言うことができる。

ただしバウムガルテンの理論には、理由の重要性はどのようにして決定されるのかという問題が残る。対立する規則のどちらの理由が重要であるか、容易に判断できない場合が現実では少なくない。この点について、バウムガルテンの記述から明確な指針を得ることはできない。規則の階層が比較的安定した状態を想定した理論であると言えるだろう。

(東京芸術大学)

文献表

出典を示す際は、書名を [] 内の略号によって、項数 (§) をアラビア数字によって記す。ヴォルフとマイアーの著作は、まず著者名を示し、[] 内に公表年を、つづいて項数 (§) を記す。原文に記された関連項目への参照指示は省略した。

- Baumgarten, Alexander Gottlieb [Med.]: *Meditationes philosophicae de nonnullis ad poema pertinentibus*, Halle, 1735. In: *Reflections on poetry*, translated with the original text, an introduction, and notes by Karl Aschenbrenner and William B. Holther, Los Angeles, 1954. (『詩に関するいくつかの哲学的省察』)
- [Met.]: *Methaphysica*, Editio VII, Halle, 1779 (1739). Reprint: Hildesheim, 1982. (『形而上学』)

- [Aes.]: *Aesthetica*, Frankfurt a. d. Oder, 1750/58. Reprint: Hildesheim, 1986. (『美学』)
- Poppe, Bernhard [Pop.]: *Alexander Gottlieb Baumgarten, seine Bedeutung und Stellung in der Leibniz-Wollfischen Philosophie und seine Beziehungen zu Knat*, nebst Veröffentlichung einer bisher unbekanntenen Handschrift der Ästhetik Baumgartens, Leipzig, 1907, S. 65-258. (『講義録』採録者は不明。)
- Meier, Georg Friedrich: *Metaphysik, erster Theil*, Halle, 1755. (『形而上学』)
- Wolff, Christian: *Philosophia prima sive Ontologia*, Frankfurt, 1736. Reprint: Hildesheim, 1962. (『存在論』)

邦訳は以下のものを参照した。ただし、引用した訳文は発表者による。

- バウムガルテン, アレクサンダー・ゴットリーブ『美学』松尾大訳, 玉川大学出版部, 1987年.
- 桧垣良成「バウムガルテン『形而上学』訳注」『カント理論哲学形成の研究—「実在性」概念を中心として』所収, 溪水社, 2009年, 370-399頁. (第100項までの訳注が収められている。)

脚注

- 1 たとえば Nivelle, Armand: *Kunst- und Dichtungstheorien zwischen Aufklärung und Klassik*, Berlin, 1971; Linn, Marie-Luise: "A. G. Baumgartens 'Aesthetica' und die antike Rhetorik", *Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte*, 41/3, Halle, 1967, S. 424-443; Witte, Egbert: *Logik ohne Dornen*, Hildesheim, 2000. ニヴェルは、天性について詳細かつ体系的に論じた点でバウムガルテンを評価する一方で、バウムガルテンは個別的なものを強調するあまり、規則の有用性については懐疑的であったと主張する (S. 23-24, 37)。だが、規則に関して十分な考察がなされていないとは言えない。リンの場合も、規則に対して天性を強調したことにバウムガルテンの功績を帰す一方で、規則については、その有用性についての積極的な発言はみうけられないと指摘するにとどまる (S. 431-443)。ヴィッテは、合理主義的な規範詩学 (Regelpoetik) をバウムガルテンが越えたと評価するが、その論拠は規則に天性との調和を求めたことに求められる (S. 47-48)。
- 2 『形而上学』は、ライプニッツ＝ヴォルフ派の思想を1000項目にまとめあげた、バウムガルテンの理論の基礎をなす著作である。『美学』でもしばしば『形而上学』を参照するよう指示がなされる。それゆえ『美学』で用いられている理論の土台を確認するために『形而上学』を参照することは、方法上適切である。
- 3 ヴォルフはバウムガルテンに多大な影響を与えた哲学者であり、マイアーはバウムガルテンの直弟子である。なおマイアーの『形而上学』(1755年)は、バウムガルテンの『形而上学』をドイツ語訳した同名の著作(1783年)とは別で、様々な事例を交えながらバウムガルテンを祖述したものである。
- 4 バウムガルテンの理論では、「なにものも理由なしに存在しない」という「理由の原理」(Met. 20. 強調省略)が基本となる。
- 5 規則が完全性を示すものであるかぎり、バウムガルテンにとって規則はすべて遵守すべきものであろう。このことは、規則を「規範 (norma)」とも呼ぶ (Met. 83) ことから窺える。しかしマイアーの場合は、従う

べき理由だけでなく従うべきでない理由もあると考える。よって、たとえ多様なものどもが理由に一致しているとしても、その理由が正しくなければ完全ではない (Meier [1755] 78)。それゆえ「真の (wahre) 規則」と「偽の (falsche) 規則」の区別が生じる (Meier [1755] 80)。

- 6 ただし、「全体の完全性」と「部分の完全性」という語はヴォルフによるものであり、バウムガルテンは用いていない。だが「複合された完全性」という概念は両者において共通なので (Wolff [1736] 507; Met. 96)、バウムガルテンも「全体の完全性」と「部分の完全性」という考え方を前提している。
- 7 厳密に言えば、規則の対立によって生じるのは完全性のうち「矛盾という (contrarie dicta) 不完全性」である (Met. 121)。
- 8 むろん、バウムガルテンの例外は、道徳的な意味に限定されない。だがバウムガルテンがもっとも大きな完全性を「最善 (optimum)」 (Met. 187, 437) とみなし、「もっとも完全な世界」においてはもっとも強い規則が優先されると述べる (Met. 446) ことから、例外の議論の骨格が最善説にあることは明らかであろう。
- 9 ヴォルフは「より完全な世界」を、より多くの例外が存在しうるが、存在する例外はより少ないような世界と規定する (Wolff [1736] 549)。よって重点は、実際に存在する例外が少ないことに置かれている。マイアーの場合、世界の完全性に関する議論において例外には言及しない。そこでマイアーが強調するのは、人間知性の限界である。我々はすべての規則を知りえないのだから、既知の規則だけでもって軽率に判断することは控えるべきであるとマイアーは注意を促す (Meier [1755] 353)。
- 10 このことは、「もっとも完全な世界」の例外について述べられた引用1と、引用2の記述が類似していることから分かる。講義録の該当箇所は次の通り。「美学は、我々の認識に大きな完全性をもたらすことを約束する。したがって非常に複合された完全性にいたる手引きを、美学は我々に与えなければならない。(…)完全性が大きくなるほど、いっそう多くの例外が在るはずである。したがって感性的認識の美においても、非常に多くの例外が存在するはずである。」
- 11 こうした規則の対立とその強弱は、バウムガルテンが明示しているものではなく、バウムガルテンの記述に基づいて発表者が構成したものである。また、具体例は主に『詩に関するいくつかの哲学的省察』(1735年)に依拠した。このテキストはバウムガルテンの学位論文であり、aesthetica という語が初めて用いられたことで知られている。
- 12 ホメロス『イリアス(上)』松平千秋訳、岩波文庫、2009(1992)年、66-83頁、第2歌、484 - 877行。
- 13 オウィディウス『変身物語(上)』中村善也訳、岩波文庫、2009(1981)年、106-107頁、第3巻、206 - 225行。